

特 249

739

今日庵
十三世

圓能齋宗匠略傳

茶道月報社編



始



3

2

露光量違いの為重複撮影

特249
739



今日庵
十三世
圓能齋宗匠

此の略傳は大正十三年九月一日茶道月報圓能齋追悼號に掲載されたものを、今回一部改訂の上、編纂したものである。
故圓能齋の逸話、言行録等は此の小冊子に載せ切れぬ程遺つてゐるが、それらは、後日圓能齋詳傳を編む時に發表したいと思ふ。

昭和九年十一月

茶道月報主幹 井口三郎記

特249
739



今日庵
十三世 圓能齋宗匠

此の略傳は大正十三年九月一日茶道月報圓能齋追悼號に掲載されたものを、今回一部改訂の上、編纂したものである。
故圓能齋の逸話、言行録等は此の小冊子に載せ切れぬ程遺つてゐるが、それらは、後日圓能齋詳傳を編む時に發表したいと思ふ。

昭和九年十一月

茶道月報主幹 井口三郎記

今日庵 十三世 圓能齋宗匠略傳

生ひたち



圓能齋千室宗匠は、明治五年五月二十一日、茶道家元裏千家十二世又抄齋玄室の長男として、京都市上京區小川寺ノ内の今日庵にうぶ聲を上げ、幼名を駒吉といつた。

母猶鹿子(眞精院)は、裏千家歴代中の巨匠と稱せられた、玄々齋宗室の女であつて、齋は其配偶者として、京都の名家角倉家(角倉了意の末)から迎へられたのである。

父又抄齋は名門に人と爲つた丈に、如何にも大まかな、世事に超脱して、自己に生きるといつた風の人であり、母猶鹿子は玄々齋の風格を傳へて、斯道に堪能な計りでなく、和歌の道にも造詣深く、藝術味ゆたかに、女性の美德を發揮した婦人であつた。

この二人の間のうひ子である駒吉は、まだ存命中であつた、玄々齋の掌中の珠であつた、初孫に對する慈愛、久しく待ちもふけて、得ることの出来なかつた男子、これぞ我が千家の茶風



を傳ふべき、正統であるとの敬虔な思ひを以て、殆んど全身の精力を駒吉の愛撫に傾注された。

玄々齋の門下として、僅にのこれる古老の話によると、玄々齋宗匠が、金澤の社中の招請を受けて同地に出張されたが、今とはちがつて通し車で、駒吉さんに後髪を引かれながら、これも道の爲めと出懸けられたが、御留守宅から毎日の飛脚で、駒吉が今日は獨りで立つやふになりましたとか、一足歩きましたとかいふことが、第一の通信として宗匠を喜ばせたものでしたと云ふ事である。

その頃の京都には、ホテル等の設備が無かつたので、素封家の大きな邸宅はよく外國人の宿舎に宛てられた、角倉家も一時佛蘭西使臣の宿舎となつたことがあつた、愛婿又妙齋の縁故から、玄々齋は一日この人々を今日庵に招待し、咄々齋に於て、自家の案になれる立禮で、花月の手前があつて後、懷石料理を出したりしたが、特に家庭的に、羈旅の鬱を散ぜしめ様との思ひ出ちであつたので、駒吉も其席に出たが、外人も打くつろひで、駒吉を懐いたりした、何に分外人の珍らしがられてゐた時代であるから、目色毛色のかはつた、鬚むしや男を、大人でも薄氣味悪く思つたのに、駒吉は嬉々として喜び、席上にあつた、玄々齋好みの淨雪作の、やしほ

の鐵鉢の菓子器を叩いて、その音色のよいのを喜んだりして怖れる態もなかつた。それからその鐵鉢は、何時も駒吉の手遊びに供せらるゝことゝ爲つたといふ。かくして駒吉はのびのびと何等の屈托もなく、無邪氣に幸福に生ひ立つたのである。

駒吉の將來に凡ての希望をかけた、斯界の明星玄々齋は、駒吉六歳の明治十年七月、淋しく地上に殞ちた、この一葉の淋しく散つたのは、蓋し茶道に落寞たる秋の來るべき先驅であつた。

玄々齋の時代を騒がした黒船の浦賀來航は、社會的變革を促すの動機となつて、三百年間絶對の權力を保持した、徳川幕府は瓦解し、封建の制度は崩壊して、藩祿を喰んで居たものは、皆これに離れねばならなくなつた。徳川幕府にかはつた、明治の新政は、外國文明の刺戟に奮起し、世界の潮流に棹さゝんと務めた、奇羅びやかな外國文明に眩惑せられ、何ものも上等舶來の言葉に現はされた、尊崇觀念を以て滔々として外國の模倣につとめ、何等の反省も自覺もなく、舊き寂のある日本を破壊して、ペンキ塗の日本に仕なさんとした。

茶道の如き、この運命にもれず、全く實用を離れた、人を懦弱にする悠長な遊戯であつて、優勝劣敗の自由競争場裡に、害毒を流しても益あるものでは無いと、いつた様なことでこれを

排し、次第に省みられずなつたのであつた。

松山藩からの扶縁に離れて定收を失ひ、只さへ苦しい裏千家は、茶道の次第に寂れ行く爲に一しほ家計困難を來し、それでも流石に玄々齋の存命中は、取立た門下も多かつた爲に、家元の權威を維持することが出來たが、坂を轉がる石は、落つる處まで落ちきらなければ、止まるものではない、玄々齋世を去り、又妙齋は今日庵の傳統を繼いだけれども、其貫目は玄々齋の門下を統ぶるに至らない、のみならず時代の機運は新らしく門に入らふとするものは、跡を絶つといふ状態で、裏千家の兜門は雀籠を張り、斯道の衰微を見せた。

それでも駒吉は、兩親の庇護の下に、一通りの讀み書きも習ひ、手前の鍛錬を重ねて、早くもこれに熟達した、が斯道の衰微は遂に父子相離る、悲劇に迄到達した。

世事に無頓着な又妙齋は、茶道不振と、それにつけ込みよからぬ事を謀りに來る人々の煩はしさに、自分は京都府乙訓郡山崎の妙喜庵に隱退してしまつたので、十八歳になつたばかりの駒吉が、今日庵十三代の家元として立たねばならなくなつた。

二 東京時代

宗室は十八歳にして、父祖の業を繼承して、今日庵を主宰することに爲つたが、斯道の不振と、父又妙齋の放漫なる處世法が禍を爲して、日常の生活にも事缺き、債鬼四集するの状態でそれに反し、一家を支ゆるの收入は殆んど絶無であつた。

借財の金利はおどろ、其上に世なれぬ宗匠を瞞着して、自分の借銭の連帶をさせた、者等もあつて、借財の上にも借財が出來た、其時偶然にも良縁があつて、攝津三田九鬼子の族西貢の長女つな子を嫁ることとなり、無色軒にて式がとり行はれた、新婦の嫁入支度は、其前途に幸多かれと、其日千家にかつぎ込まれたが、債權者に見付かると、持つて行かれてしまふから、預つて上げませふと、親切ごかしにこれを横領した、悪い出入のものもあつた、こんな極端な手段を弄しても、宗室は之を咎むることがなかつた、この寛大さが、周圍の群少共に、私利を謀らないものは損だとの感念を懐かしめたのも、是非ないことであつて、業體の中に暮夜密かに、千家傳來の茶器を、長持に入れて持出す等の事も、あつたといふことである。こんな環境

の間に、若年なる宗室が、濫することなく清い自己を保つて居たことは、普通の人の出来ないことである。

又妙齋の僅かあつた門下は、其隠居と共に家元を退散し、玄々齋取出ての茶人は自ら高しとして、宗室の鼎の輕重を問ひ、宗匠と呼ぶものなく、幼名を手軽く駒はんとよんで、これを小供扱ひにした。

如何に辛抱強い宗室も、あらゆる方面からの壓迫に堪ゆることが出来なくて、結婚の翌年に出来た初子と、親子三人は、神戸のつな子夫人の親里にたよつて、徐に將來取るべき方針について考へたが、終に茶道の衰微を挽回する爲に、東京に旅立つことに決し、親子三人は淋しく西家を辭し、京都をあとに東京に向つたのである。

宗室の東京生活は、麴町と麻布とであつたが、麻布我善坊町の時代が一番長かつた、舞鶴の藩主牧野子爵は、西家と姻戚關係があるので、この縁故から舞鶴の出身である、當時の海軍次官として羽振のよかつた、伊藤雋吉中將は、宗室の一族に同情し、種々と面倒を見た、麴町の麻布我善坊の寓居も、伊藤中將の持家であつた、宗室の一家は東京に草鞋をぬいだ翌日から

賣喰生活が始まつた、つな子夫人が米をかふ金が無いといはるゝと、だまつて自分の着物を、通りかゝりの屑屋に渡して、金さへ改めずに夫人の前に投げ出すといふやり方であつた。

こうした苦しい生活の中にも、宗家としてのユツタリした風格は失なはれてゐなかつたとみえ、ある夜麻布の縁日に初子を抱いて、散歩に出懸けたが、露店で白鼠をうつて居たので財布をはたいてこれがかつて歸つた。翌日の米代にも心配して居るのに、あまりのことゝ、如何に氣丈の夫人でも、つひ愚痴の一言もいひたくなるのも、女心であらう、宗室はこれには一寸當惑して、こそ／＼と二階に上つて蟲籠をさがし出して、鼠を其中に入れて鴨居につるして置いたが、翌朝になつて見に行くと、鼠が動く度に、籠はゆら／＼と動くので、目をまはして死んでしまつたのを見た、宗室は悵然として悲しんだといふ逸話がある。

麻布の寓居の附近には、貧民窟があるので、宗室は時々其處に出懸けて、自分が事を缺くのも省みないで、困つて居るものに金をやつた、これを徳として長屋のかみさんはいふまでもなく、くりから紋々のアニイ連が、門口庭まはりの掃除をしてくれたりして、華奢な主人との對照は頗る妙であつたといふ。

宗室は斯くして、絶えず金といふものに苦しめられて居たが、彼の求めたものは、より高いものがあつた、より値打ある人の心にあつた、より貴い斯道の上にあつた。毎日車に乗つて、寓居を出懸けて、裏流の茶人を訪ねたり、名流大家の門を叩くのが日課であつた。

彼は一日伊集院兼常氏を訪ふたことがある、伊集院氏は裏流の茶人として聞えた人であつて、直に宗室を座敷に請し、諄々として時代の趨勢を説き、これからの時代に茶で以て立つといふことは、中々困難なことであるから、年も若いことであるし、一層一思ひに茶道を思ひきつて、學問をして見てはどうか、失敬だが學資として三千圓の金を、差上げてよといと、親切に言つたが、宗室に取つての、憧憬は、學問でなくして茶道であつた、宗室の生命は、茶道の興隆にかゝつて居るのであるから、御親切は忝いが、私はどふしても、この茶道で立ちますと、言下にこれを斷つて、何等躊躇する所がないので伊集院氏も再びこれを強いなかつたといふ。

其頃宗室に従つて、苦しみを共にしたのは、菊地宗不といふ業體で、殆んど獻身的に仕へた、或時米代に差支へて居るのを見かねて、菊地が何處かで、二圓五十錢の金を工面して來た、宗室はこの金はどうして調達して來たか尋ねた處が、菊地は答へやうもなく、それは私の小遣で御座りますと答へたのでそれなれば御前が入るだらふといつて、どうしても手に取らふとしかかつたといふことである。

桐生に裏千家の社中があつた、宗室は時々出張して教授し許狀等を與へたりした、ある時の如き許狀を書く紙が無くて困つて居たので、菊地は何處からか二帖の奉書紙を心配して來て、漸く間にあつたが、桐生から三十幾圓といふ金とゞくと、改めても見ないで、其儘それ紙代といつて、菊地の前に投げ出したといふ事である。

宗室は降つても照つても、車を出懸ける。外に行く處がないと今戸焼の工場に、一日中工人が茶碗を作り上げるのを見て居たりした、これが四五日も續くことがある、出來のよいのは購つて歸つて、訪問先への手土産にしたりした。

毎日のこの車代は、一家に取つては中々の負擔であつた、で經濟的に月廿五圓の月ぎめの車夫をたのんだが、月末になつて金が滯つた、處が車夫は酒の勢をかつて、上り込んで居すわり催促をする、宗室は一向頓着なく煙草を吹かして居る、車夫はかさにかゝつて惡體をつくの

に、表は一ばいの人立である。夫人は見かねて髻にさして居た金簪を投げ出して、これを與へた、車夫はこれを手にすると、表に飛出し、其金簪をふりかざして、この御神がこんなものを呉れたと、わめき立てた時には、つな子夫人はあまりの恥かしさに其場に泣き伏したが、宗室は相變らず、煙草をふかして居るので、ほんとにたよりない心持がしたとは、今は亡き、つな子夫人の當時の述懐であつた。

この放浪生活の明治廿六年七月廿四日、淡々齋(現宗家)が生れたのである、一しほに子煩悩の宗室は、外出したならば必ず三人の子供への土産を忘れなかつた、長女のはつ子は、明治二十三年七月、次女のはな子は、明治廿四年九月の誕生であつた、まだ廿一二歳の宗室として、一家を支ゆる丈けでも、可なり重荷であつたし、つな子夫人も名門の出で、世の荒い波にも當らず、お乳母日傘で育てられた人であるが、俄に困難な内政を委ねられて、内にあつての拮据經營は、他人の想像し得ない苦しさがあつたらう。

宗室も亦内外試練にみたされた、この東京時代にあつて、よくこの人格を陶冶し、自己を玉成したことは何處までも自助の人で無くてはならぬ、天は自から助くるものを助くるの箴にも

れず、北白川宮能仁親王殿下は、宗室が斯道に對する苦衷を思召され、偉名の一字を下して、圓能齋の號を賜はり、圓滿に其能を發揮せよと激勵せられ、これと相前後して小松宮彰仁親王殿下は、鐵中の鏘々たる者たれと宗室の前途を祝福して、鐵中の號を賜はつた。蓋し宗室の今日あるは、この鞭撻に答へたものに外ならぬ。

斯くして宗室は、稍斯道の人々に認めらるゝ様に爲つたが、寒いにつけあついにつけ、嬉しいにつけ悲しいにつけ、思ひ出すのは今日庵のことである、宗且手植の銀杏に鳴る嵐の音は、幾夜宗室の夢に通ふたか、偶舊社中からの勧めもあり、歸心矢の如く京都に歸つて來たのは、はつきりしたことはわからぬが、廿二歳の春でもあつたらふ。

三 荒神口時代

權債者の手に渡つた今日庵は、旅館とするには不便な位置であり、さりとて料理屋に仕様にも、間取が思はしくなく、終には幾つにも仕切つて間貸をやつて見たが、借手の中には織機を据ゑて、賃織をやるといふやふな状態であつた。

その頃は茶道具等の値段も、長持一棹何程といふて評價さる、程の、茶道衰微のドン底時代で、誰しも今日茶道の復興を見やふ等とは、夢にも考へなかつたのであつた。

それでも茶道に執着の深かつた圓能齋は、其成果を打算せず、自己の信念に生きて、他を省みず知らぬ東都の旅の空に、粒々たる辛苦を重ねて、聊か悔ゆる處がなかつた。

待つ宵の月は淋しく蕤の間に落ち、明の鳥のあわたゞしく、増上寺の森に騒ぎ立つ時、思ひは故郷の山河にかけりて、再び父祖の故宅を取戻すことが、神佛への第一の祈りであつた。

圓能齋の心は遂に定つて、稍根柢の出来かゝつた、東京を見すて、再び京都に歸つた。歸洛の草鞋脱ぎは、今日庵に近い、寺ノ内妙顯寺の方丈であつた。

歸つて来たことは来たが、窮迫は依然として時には米の一升買ひをしなければならぬ時もある。あつて、一圓の肴代を月十錢のなしくづし等といった風で、口善悪なき京童は、貧乏千家といつた程であつた、それでも宗家の氣品を保つて、飽くまで應揚にこの窮迫を窮迫として、あくまで皎潔に一身を處し得たことは、圓能齋の資性の然らしむる處ではあらふが、かくれてこれを助けたつな子夫人の努力をも認めなければならぬ。

妙顯寺から室町頭に、室町頭から後に、荒神口に寓居を構へた。

荒神口時代に弟子入したのは、新島襄夫人（今は故人）、つな子夫人の縁故から大澤徳太郎夫人、現宗家淡々齋夫人母堂の伊藤宗幾刀自、今は裏千家の名譽教授になつて居る田村宗園等であつた。

この時代には茶道具といつても、僅に水指と茶碗とがある位で、圓能齋が書見をしたり、書き物をしたりする時につかふ、一脚の机が水屋の臺に使はれたのであつた。

この窮迫時代でも、随分自分の事をかいても、人の喜ぶ顔を見るのがすきであつた、ある冬の日大阪に請ぜられたことがあつたが、午後から雪が霏々としてふり出した、大阪で貰つた謝禮で、留守居のものに土産を購ひこんで来たので、七條驛では車賃がなかつた、一寸のむかふも見えぬ程にふる雪道に、下駄の鼻緒はぶつゝりきれてしまつて、雪道を裸足のまゝに、宅に歸つて来て嬉しそうに土産を披けられた時には、皆々有難涙にくれたといふことである。

かく窮迫の中にも、明治三十年八月愈今日庵を借受けて之れに移轉することゝ爲つたが、其時荒神口から運びこんだ茶器は狂言袴菱形吳本の水指只一つであつたといふ。

四 今日庵時代（前期）

圓能齋は今日庵に歸つたといふものゝ、それでこれまでの窮迫から脱し得らるゝものではない、債鬼は依然として四集し、これとの交渉丈けでも随分頭をつかつた。

或時の如き、執達吏が財産の差押へに來た、圓能齋自ら、立ち出で、斯くなるのも凡て自らの致す處、又誰をうらみやう、御納得の行くまでに、私の所有品は皆差上げますと、あまりに其態度が立派だつたので、執達吏も感じ入つて、出来る丈けの好意を運んだといふことである。

今日庵時代に入つて、茶道はジリ／＼上りに復興し、社中も次第に増加して行つたが、それでも舊債整理には中々の努力がいつた。

圓能齋は茶道の復興に、全力を傾注して外部に活動して居る間に、つな子夫人は獨り、自己の居室に閉居して、默想練心斯道の發達を祈るのが常であつた、或る時堺に幽居した又抄齋が、今日庵を訪れたが、つな子夫人が圓能齋の外出中は何時も居間に引こもつて居るのを見

て、おまいは毎日其處に何をして居ますと尋ねられたので、夫人は毎日木魚の音を聞いて居ますと答へた。又抄齋も會心の笑みをもらして、これに默居庵の三字を書して與へたといふことである、かくして夫人の熱禱、圓能齋の血の出るやうな活動が、茶道復興の機運に乗じたのであつた。

爾來次第に有力な社中も出來、次第に順調にむかつて通み行つたのである。

圓能齋は何處までも、來るものは拒まず、去るものは追はずの主義で、其門戸は自由に開放されてあつた、其困難時代に白眼を以て、圓能齋に接した人でも、これを訪ふ時には凡て舊事を忘れてこれに接する、其が自然で作爲する處がない爲に、今度は心から圓能齋の人格に服するといふ風であつた。

だといつて何事にも、圓滿主義を取つたかといふに、必ずしもそふと計りには行かぬ有力なる社中と雖も、非違があれば、これを弾劾して憚らないが、圓能齋の人格は、よく此等の人々を伏せしむる丈のものがあつた。

圓能齋に揮毫を囑する社中は澤山ある。興到れば筆を下し、一氣に四五十枚を書き上げると

いつた風で、其出来不出来には一向頓着しなかつた、或る社中の一人がその悪筆を罵つた事を聞いて、圓能齋は私は書家や畫家では無い、書の奇麗なのや畫の上手なのが欲しいならば、書家畫家の處へ行くがよいと、笑つて居つたといふことである。

或る年の初釜に業體が、爐に火をつぐ爲めに誤つて、疊にもえ穴をあけてしまつた、業體はまつ青になつて居る處へ、圓能齋が出て来て、火が落ちたか正月早々それはけんがよいと喜んで絶えて其人の失策を咎めなかつたといふことである、ある獻茶のはれの場所で、水屋に居た業體が、炭斗に鉄を入れる事を忘れて居たが、圓能齋は袱紗で釜を引上げて、手前の運びを進めたが、翌日業體は其失策にどんな御小言が出るかと戦々として、圓能齋の前に出ると、圓能齋は昨日は御苦勞だつたといつたきりだつたので、業體は重ねて昨日の失策を詫びると、そふだつたかいなと、何も忘れて居るといつた風だつたといふことである。

五 今日庵時代(中期)

裏千家の茶道の世に流布する愈々その範圍を擴うして來た、明治四十年元伯宗且の二百五

回忌大法要が、大徳寺聚光院に於て營れたるに際しては全國一門の集るもの當時の記録に依れば『雲霞の如く來會なし中にも玄々齋時代の直門七八十歳の老軀を以つて遙々數十里の路道を遠しとせず參拜あり』とある程だからその盛況は推察するに難くない。

圓能齋苦闘の實は、着々として擧り、四十一年秋には圓能齋の主宰する今日庵淑靜會が生れ、東福寺の大獻茶があり、瑞草社亦八十餘回を重ねるの有様で、四十二年の五月二十三日には聚光院で玄々齋の三十三年法要が營れた、法要は本堂に於て圓能齋の供茶の外、その拜服席及び寄贈席總計十一ヶ所の多數に上り、現在のそれに比して勝るとも劣らぬ盛況さである。

これと前後して圓能齋を中心として生れた茶道樂會及びその八景茶約開きの茶事など當時茶會の話題を賑したものである。

四十三年二月二日には圓能齋の長女初子が大阪伊藤源次郎氏と結婚し四十四年の四月一日に現宗家淡々齋當時玄句軒永世氏は門人知己九名を招じて生涯初めての茶事を寒雲亭に於て催した、時に年十九。既に茶道貢獻に對して鬱勃たる英氣あり、席上眞精院は『雲井まで登れやはたのひな雲雀』と吟じ、圓能齋亦『人まねにたつる濃茶の深みどり』と打ち慶んだものである。

同春には九鬼男久松伯等に眞臺子の引渡し等あり圓能齋の東上頻りて多忙を極めた。

その年の八月圓能齋は當時の女學校に於ける茶儀科の點前が區々亂雜を極め人を迷しむるの甚しきを怖れ、將來これを統一し、且つ茶道の和敬清寂の大精神を以つて婦徳の涵養に資せしむべく、茶道夏期講習會を興し、八月中三十日間女學校茶儀科教員及び將來同教員たらんとするもの、爲に速成教授法を執る事とし、終了後資格證書を授與するの規定でその第一回が開催された、爾來毎夏期に開講されて本年正に二十三回を重ねるに至つた。

四十四年の十月以降に於て兵庫縣下幸保山に圓能齋好の新席が出来て前後十數回の來往がありその年は暮れた。

四十五年の春四月には十四日に東京湯島天神の獻茶式、十八日には太閤垣の獻茶式、その二十一日には聚光院に於て少庵居士の三百年忌が營れた、六百餘人の參會者で十一席の在釜席は何れも數寄者で埋つた、かうしてこの春から夏へかけては圓能齋は目の廻る様な忙しい月日ばかりが夢とすぎた。

その七月、明治大帝の御登遐に會ひまつりて七千萬の赤子號泣慟哭恐懼措く處をしらず、八

月、大正と改元あり、九月十四日は御埋棺當日に相當するので咄々席に於て獻茶式をば行つたが以後全國に於て明治大帝への獻茶式は數十ヶ所に於て舉行された。その年は九條家の御道具調べを仰付かつた外は茶事と出張との外は大した事もなく過ぎて諒闇の淋しい新年を迎へる事になつた。

大正二年の一月十三日は、今日庵職方に依つて百十會が組織された、その七月には二女花子が山澤佐一郎氏と結婚し、十月十日には伏見稻荷神社の正遷宮に際して特別獻茶が執行されたなどあつて年は逝く。

六 今日庵時代（後期）

紫野に瑞雲棚引き小川の流れば盡きず、今日庵の宗且銀杏は、いや繁りに繁つて行つた。茶道の隆盛は愈々旺んに、山間僻地津々浦々に至るまで、松風の音を聞かざるなく、茶煙のなびかぬ處もなく、今日は何處で茶の湯の催し、今日は彼處で茶事の樂ひと言つた有様で、而かもその十中八九までは裏千家流であると言つても過言でない程斯流は發達したのであつた、圓能

齋が粒々刻苦三十年の苦節が酬ひられ、今將に赫々たる光明の域に到達したのである。

圓能齋宗匠亦年齒不惑を超え、その人格は益々温良圓滿に、その手法は愈々融渾圓熟の妙境に達し、外數萬の社中を統率し、内宗家の基礎を鞏固にする事を得た。

恰もこの時宗匠は四十三歳、特に賢夫人として内助の功著しく、同宗匠の今日をあらしめたとさへいはる、宗綱夫人は四十四歳而して、結婚後二十有五年に相當するので、宗家の萬歳を祝すべく、併せて又妙齋眞精院兩宗匠の還曆祝賀會の議が持ち上つた、即ち大村榎軒氏を初め故西村宗圭、故中德齋、故中村宗克の四氏が發起人となつて、大正三年三月二十二日、京都岡崎平安神宮大極殿及びその神苑に於て舉行された。

小松宮家、北白川宮家、久松伯、石黒男其他數百名の祝詞あり、橋殿に松向軒社中の立禮式、白鷺の席には前記發起人の受持席、其他餘興模擬店の設備などあり來會者は無量一千を算して非常の盛況を極めたのである。

その翌月は 昭憲皇太后の御大喪に遭遇して國民は上下を舉げて悲痛の涙に咽んだのであつた。翌五月二十四日には遙拜式並に獻茶式を今日庵に於て舉行した、同年十一月十二日から今

日庵又隱席に於て銀婚披露當時到來品披露を兼ねて口切の茶事が十二月十九日まで催された、この頃の永谷には黙居庵宗綱眞精院玄句齋永世（現淡々齋）の三氏の名を見出す事も今にして言へば感慨尋常ならざるものを覺ゆる、

大正四年の新年は諒闇のうちに明けた。

然し一方茶界の發達を加へ、圓能齋玄句齋兩宗匠は益々多事連日東西に出張し席温まざるの有様で同年三月には今日庵と因縁淺からざる大徳寺塔中高桐院に於て同院祖清巖和尚の二百五十回忌記念の獻茶や、兵庫縣下岩井勝太郎氏の別邸内に圓能齋宗匠好みになる蓬萊庵や又隱寫の新席が成て盛大な席開きが催されたのもこの頃の事である。

恁くて旭日の登るが如き勢ひで斯流は發達して行つた、而して大正四年五月三十一日には玄句齋が永世を改めて宗叔と名乗つた時で六月十三日にはその格式披露が今日庵精中忌の席上に於て催された、即ち利休第十四世として淡々齋宗匠の地位の確證された時であつて、圓能齋が斯道より發展の策としての内助と、一面は後事を托する第一階梯が基されたものである、當日は咄々の宗家席を初め奥待合（福山宗伯）無色軒（雪輪會）寒雲亭等に在釜京阪神の社中を網

羅したのであつたが、この格式披露會は其後須磨花月、大阪網島榎卯樓、津市聽潮館等に於て催され何れも豫想外の盛況で今日庵の基礎は愈々鞏固に向つた。

而して圓能齋は益々その重きをなすと共に日々今日庵を訪ふもの數百を算するの好況で恰も茶道黄金期の現出を見るに異ならず、當時全國の引次者だけでも五千以上を算するの有様で、圓能齋としても亦得意の時代であらねばならない。

然し圓能齋の性格が決して自ら誇り、自らを大にするなどの人でないから、自己的満足は微塵もなく、只茶道の發展を無二の満足として、更に研究に研究を重ね、内心琢磨を加へられて居たもので、その點前の如きは最初より玲瓏眞摯他の範とされて居つたのが、この邊りから一層枯淡、玄妙の域に入り最早何人の追従をも許さぬ迄の仙境に達したのである。

大正四年の秋には 大正天皇御祚踐の曠古の大典を挙げさせられた、我秋津洲瑞穂國の千代ゆるぎなき基ひは愈々永く、天壤地久と共にいや榮ゆる喜びを上下舉つて祝福し奉つた、殊に斯界では全國各地に奉祝茶事が催され、奉祝釜が懸つていや盛に祝福氣分を添へて、蓋し未曾有の殷盛を見た譯で、今日庵に於ても亦十一月七日から數日間その釜が懸つたのは勿論であ

り、同月十八日京都市主催の御大典奉祝大園遊會が大極殿に於て催された時にも圓能齋はその抹茶席四ヶ所を擔當した。

翌大正五年八月十一日には圓能齋の母堂眞精院猶鹿子女史が六十七歳をもつて物故された。刀自はよく夫君玄室を助けて、刻苦精勵、顧みられざる茶道と地に陥ちんとする宗家を支へ來つた人であつて、又妙齋が堺へ隱栖後は老軀も厭はず、親しく稽古場に出張して門弟の教授に携り、よく圓能齋を輔佐されたものであつて、圓能齋亦この人に負ふ處も尠くなかつた譯である。

早忙の月日は過ぎて行つた、大正五年の十二月には十五日から十日間無色軒で夜咄茶事が催され 同月には神戸清和會が生れたるなどあり、淡々齋の居室となつて居る北部の土地建物約八十餘坪を買收して梅糸庵を新築するなどありかくて敷地も漸次擴張され一方長男玄句齋に令室を迎へる議が進行し仙臺市伊藤清氏の令妹嘉代子氏を迎へられて、その翌年の二月二十日華燭の典を舉行されたそれと共に玄句齋の齋號を故九鬼隆一男命名のもとに、現在の淡々齋と改められた、成婚祝賀の茶事は隨所に行れて、茶の湯の流行はいやが上にも隆盛を極めた。

愆くて今日庵は又隠の松の葉色の緑いやますと共に益々家萬歳を祝ぐ聲は軒端に通ふ松風の音に和したがその年の十二月八日父又妙齋の逝去となつた。

又妙齋はその半生を擧げて凋落衰微の家運を挽回する事に努力した、父は子を勵し、子は父を頼ひて奮闘努力の二十數年間は圓能齋に取りて最も思ひ出多い處である、而して茶道の薰陶を親しく享け、他日斯界の重鎮とし流派中興の偉人として仰がるべき基礎を培れた人を亡つたのであるからして、今岳父の長逝に直面しては轉た感慨無量なるものがあつたと思ふ。

然し、もうこの時代は當時の艱難困苦流離轉敗の過去の生活も、昔日の夢物語として語り合ふ程に、内外共に充實完備の域に到達して居り、圓能齋がその父君の靈前に手向けする幾他の賽供があつた譯である。

曩に母堂を送り、今又嚴父を亡ひ、傍には嫡子淡々齋の格式披露、その婚姻等、こゝ兩三年間の今日庵の内外は頗る多事であつた、而して一面その社中の増加は潮流の奔るが如く、報徳會の成立、大正七年六月大阪出張所の成立等諷々の風の野を渡るが如き有様であつて、斯道の爲の一語は圓能齋をして不惜身命の努力を爲さしめて倦まなかつた。『茶の爲に登る、』の信念

は當時既に己に鞏固不拔なものであつたと言へる。

大正七年三月十日大徳寺に於て又妙齋の百ヶ日追善大茶會を營まれ、翌大正八年十一月二十三日一燈の百五十回忌が大徳寺に於て修された、一燈は天明大火の後今日庵を再建し、又、實兄如心齋と謀つて、現在傳る處の七事式を完成せし等斯道屈指の功勞者であつて、その人の大年忌に對する圓能齋の緊張味は尋常一樣のものでなかつたのは言ふ迄もない、さればこそ、當日山内には十ヶ所の多き在釜を見て、當時の茶界をして驚嘆せしめた處であつた、更に翌年には、それを記念すべく又玄會の發會を見、居士が遺品たる老松台子の皆具を初め國師丸釜籠炭取等の再好みが完成し、一方今日庵及び寒雲亭の營繕なり永く流祖の偉業を後世に、傳へると共に圓能齋亦その名を永世に垂れた處である。

七 その晩年

銀婚式を擧げてより早忙の十年は夢とすぎた、然しその十年間は、圓能齋が一代の覇氣と、畢生の努力と、鬱勃の英邁とを傾倒して、五十有三年間の大事業をこの旬年の間に完成した處

であつた。

内は邸宅茶席の修營増築なり、財政經濟の整理を了し、後繼の淡々齋宗匠をしてその貫祿を重からしめ、外は全國數千の引次教授方を養成し、大阪交友會其他無數の團體を統率し、東西幾萬の社中を直接間接に薰育し來つた。而して更に特筆すべきは久しく廢毀地に陥ちて外道視され遊戯視され、侮辱され來つた茶道の本旨を宣明し、その眞髓を徹底せしめ、所謂茶人なるもの、地位面目を向上せしめ眞價を發揮せしめた功績こそ實に蔽はんとしても蔽ふべからざるものである。

由來人生五十、圓能齋にして業なり功遂け名を爲さしめたものである。

茲に於て宗匠知命を迎へ即ち大正十年六月九日、洛西嵐山に於て盛大な知命祝賀茶會が催されたのも世人の記憶に新なる處である、同祝賀會は猿會の納會とを兼ねて舉行されたもので、猿會は圓能齋が申歳の生れに因んで大正四年五月庚申の日に圓能齋が發會式を擧げて、年を重ね前後十二回を経て、即ちこの納會に及んだものである、祝賀會の盛況は今更々を要せぬ。

大正十年には洛陶會主催の東山大茶會が舉行され、豊公が北野松原に於ける大茶の湯にも比

すべき大會が催された、時に當つて、宗匠亦祇園清々館の席に於て會員に濃茶を呈された事もその晩年を莊る一端であらう。

この年の十一月には盛大なる東山高臺寺北政所の獻茶式が舉行され翌十二年二月には大圓眞草の點前を古法に則り、工夫を新にして台子傳法中に加へられた。

大正十二年四月十九日には淡々齋の嫡男政興氏が出生された、茲に連綿として絶えぬ家系繼承者を得た圓能齋の欣びは譬ふるにものがない、而して同宗匠は五十二回の誕生を迎へたる二つの欣びに依つて五月二十一日岡崎平安神宮神苑に於てその報告獻茶式引續き祝賀園遊會が催されたのである。

當日は雨天であつたにも關らず來會者數百の多きに達する盛會であつた。

大正十二年六月六日には交友會主催で大阪市に於て茶道講演會が開催された、當日同宗匠亦所感の題下に一場の講演をされたが、蓋し公開の席上に於ける講演の最初であると共に最後であつた。

圓能齋が普請好きであつた事も有名な點で今日庵には平常々雇の作事方が、鑿匏の音を絶や

した日が無いが十二年八月には新に土藏の上棟式及び表廻りの修繕がなりこの年の七月から又玄會中の大事業である又隠席の修繕に着手され木村清兵衛これを承つて爾來半歳餘の年月を費して新装全くなるに至つた。

一方、十二年の十二月には北野神社に獻茶具を奉納して大獻茶祭があり、岳父又抄齋の七回忌追悼茶會が大徳寺に於て催された。

明けて十三年の春を迎へた、二月一日には神戸清和會の發會式に臨み生田神社の大獻茶を執行四月には豊公廟大獻茶、大徳寺管長傳衣老師の晋山式の呈茶六月の建仁寺の大獻茶等枚舉に違なく、依然多忙の生活であつた。

一方前述の又隠の席の修繕全くなつたので三月三日を初會に五月中旬まで前後六十餘回の席開きの茶事を催した。

蓋し又隠の席は宗且居士が最後の記念として裏千家にあつて最大重要なもので、これが修覆は多年の宿望であつたのだ、それが今漸くにして工成り、姿整ふたのであるからして宗匠が内心の欣喜は察して餘りあり、宜なる哉同席開きの茶事は晩近催されたる幾多の茶事中最も心

身を傾倒し、且つ最も楽しんで催された處のものである。

今にして思へばこの連日の茶事は一方ならず宗匠の健康を害するものであつた、日々の心身の苦勞は不知不識の間に宗匠の肉身を蠶毒して行つた、然し不撓恬淡の性格者である同宗匠は更に色に現す事なく隠忍よくその最後まで催を続けられたのであつた。

然し既にこの時にはもう病魔は宗匠の肉體の一部を冒して輕微の心臟症と脚氣の診斷を餘儀なくせしめたのであるが、勝氣の圓能齋としては病疾に對して微塵恐怖の念なく、平素の如く許狀に書附物に繁忙の日のみ打ち續いて靜養する暇とても作り得ぬ、又作らうとしなかつた。

而して、大正十三年春今日庵老分たる西村宗圭翁が逝かれてその追善茶會が六月二十四日高臺寺に於て舉行された、宗匠は故人が生前の功績深甚なるに鑑みて、深く哀悼の意を表すると共に、當日追福の濃茶を呈してその靈を慰められた即ち高臺寺鬼瓦席に於て釜を沸らせ來會者約二百名十幾回の濃茶手前を終始自分にて重茶碗を用ひて入念に點てられたのであつた、宗匠が如何に茶道に對して勸直而して社中に向つて厚いかは當日參會した人の等しく感嘆した處で

あつた。

然し乍ら耐忍の病苦は遂に隠す由もなく、その顔色はや、蒼白に、その呼吸は幾分切迫に、見受けられたのであるが、猶且つ平靜を装つて居た。

斯くて數日後には病革り、絶體の靜養を餘儀なくされる事になつたのである。

八 その終焉

圓能齋は豫てから心臓と肝臓に病があつたが、大正十三年六月下旬頃から、宿痾再發し菅野主治醫は病氣稍重體なりとて、中西醫學博士の立會診察を要求し、専ら治療に努めた、然るに其症狀が格別痛苦を伴はない爲めに、圓能齋はこれも宿痾の爲に、久しく病床に横はれる、宗綱夫人の看護に傾注して、自己の病症に就ては少しも意に介せぬもの、様であつた。

かくては嘗に病氣の回復を遅らすのみならず、終には大事に至るべきなきかを憂へ、主治醫及親近者は、其の病症が如何なる程度まで、進みつゝあるかを本人に熟知せしめ、其注意を喚起す爲め、レントゲン光線によつて、内臓を影し、これを健康體の寫眞に比較して、目のあた

り其病症の輕からざることを知らしめんとて、漸く圓能齋の同意を得、七月十一日齋藤病院に於て實驗を爲すことゝ爲つた。

診断の結果は、圓能齋の豫期に反し、意外に重體であり、當日病院まで出掛けて行かれた事すら、あまりに大膽で冒險であつた程、心臓は常態の二倍位に擴大し、辨の活動は自由と敏活を缺き内臓諸機關に鬱血し、血行遲滯粘着し居ることを發見し、絶對安靜を必要とすること等明瞭となつたので圓能齋も悟る處があつてそれより、頓に靜養に努むるに至つた。

絶對安靜の必要上、面會を謝絶し、書き物等は控へ、毎朝缺かしたることなき、邸内諸佛神に對する、禮拜勤經さへも禁められたが、それでも臥床に到らず、起臥隨意で臨終當日に及んだ。

淡々齋は圓能齋の勧めにより、七月の末頃から、夫人令息令嬢等と共に、垂水の谷川氏の別邸にあつて避暑勞茶道教授を爲し、今日庵の方も圓能齋病氣の爲め教授萬端淡々齋の受持と爲つて、日々垂水より歸洛して見廻て居た。

圓能齋逝去當日は、恰かも今日庵主催の第十三回夏期講習會の開會式で、圓能齋は珍らしく

上機嫌で気分も優れ、臨席の上一場の挨拶をされたその挨拶こそ、圓能齋の茶に對する悲痛な告別とならふとは誰れが思はふぞ。

圓能齋は挨拶了つて後、淡々齋の點茶があつたのを熱心に見て、それで講習會は了つた。會了つて圓能齋は別室で淡々齋と共に家政上の將來の事等について、懇々と話があつて、珍らしく晝食を共にし避暑先の孫共に、菓子等を箱につめて、淡々齋に托したりした。

食事終つてから、看護婦を省み、病中のつな子夫人が至つて蠅がきらいだから注意してやつて欲しいといつて、其ま、床にはいつて、靜かに眠られたのであつた。

淡々齋は今日は何時よりも元氣な、圓能齋の顔色等を見、靜かに眠つて居らるゝ様子にすつかり安心しきつて、午後二時半京都驛發の列車で、垂水に引返したのであつた、これぞ父子が、幽明界を異にする、永き別れとならふとは、神ならぬ身の思ひもつかぬことであつた。

淡々齋は垂水について、圓能齋危篤の飛電に接し、驚愕措置を失して居る處へ、引續き逝去の報に接した、朝電夕露あまりの變事に、涙さへ出です蒼惶として歸庵したのであつた。

當日は建仁寺兩足院に、瑞草社の月並茶會が催され、當番は廣瀬拙齋（圓能齋令弟）であつ

たので、玄關の人達は多く其方に出拂つて居て、只次男三郎、西象庵（つな子夫人令弟）の二人が、居残つて居たのである。

午後二時半頃、靜かに眠つて居た圓能齋は、ひどい咳をされたので、看護婦は驚いて駈よつて見ると病に急變が來た様子に急を菅野主治醫、中西博士に報じ、來診を請ふたが、何れも往診中で要領を得ない。

看護婦は右手の脈を檢し、次に左手に移らんとするや、脈は既に絶え、人口呼吸其他百方手を盡したが、英靈とこしへに去り、眠るが如き形骸が靜に床上に横はつた、時に午後三時である。

千家では門前通行中の三宅醫師を要し應急の處置を委ねて居る處へ稍後れて中西博士、菅野主治醫急をきいて來診し、百方術を盡したが、努力徒に、中西博士は遂に死を宣した、享年五十三、病名心臟僧帽辨不開閉鎖症、腦の「エンボリー」併發によつて死を致したといふ。

天に歸した圓能齋は顔に些かの苦悶の跡を止めず形骸素るゝことなく神韻渺として漂ふを覺えしめた。

斯くして今日庵十三世圓能齋の、一生が、終焉を告げたのである。

誌 雜 刊 月 の 古 最 界 斯

報 月 道 茶

圖五 金前年ヶ一 錢拾五 部一

▽お読みになつてゐますか？▽

◎本誌は明治四十二年亥々齋三十三回忌を記念して創刊され
た今日庵宗家の機關紙で二十六年の歴史を有する斯界唯一
の雜誌です

◎每號百數十頁宗家淡々齋宗匠が自ら「風興集」の題下に各種
點法に就て執筆されてゐる他、名士、斯道の權威等が茶道
に就て有益な記事を執筆されてゐます

◎各地茶會の記事寫眞等を滿載する他、茶道問答欄を設け讀
者の質問にお答へしてゐます

一趣味と實益を兼ねた雜誌、茶人なら教へる人も習ふ人も必
ず讀まねばならない雜誌です

◎下記發行所へ御申込み下されば最近號を見本に差上ます

▽御申込みは直ちに！▽

社 報 月 道 茶 頭 川 小 市 都 京 所 行 發

昭和九年十一月十五日印刷
昭和九年十一月二十日發行

非 賣 品

著 者 兼
發 行 者

京 都 市 上 京 區 小 川 頭

茶 道 月 報 社

右 代 表 井 口 三 郎

印 刷 者

京 都 市 下 京 區 西 洞 院 七 條 南

内 外 出 版 印 刷 株 式 會 社

右 代 表 須 磨 勸 兵 衛

誌 雜 刊 月 の 古 最 界 斯

報 月 道 茶

圖五 金前年ケ一 錢拾五 部一

▽お読みになつてゐますか？▽

◎本誌は明治四十二年亥々齋三十三回忌を記念して創刊され、
た今日庵宗家の機關紙で二十六年の歴史を有する斯界唯一
の雜誌です

◎毎號百數十頁宗家淡々齋宗匠が自ら「風興集」の題下に各種
點法に就て執筆されてゐる他、名士、斯道の權威等が茶道
に就て有益な記事を執筆されてゐます

◎各地茶會の記事寫真等を満載する他、茶道問答欄を設け讀
者の質問にお答へしてゐます

一趣味と實益を兼ねた雜誌、茶人なら教へる人も習ふ人も必
ず讀まねばならない雜誌です

◎下記發行所へ御申込み下されば最近號を見本に差上ります

▽御申込みは直ちに！▽

社 報 月 道 茶 頭 川 小 市 都 京 所 行 發

昭和九年十一月十五日印刷
昭和九年十一月二十日發行

非 賣 品

京 都 市 上 京 區 小 川 頭

著 者 兼 發 行 者

茶 道 月 報 社

右 代 表 井 口 三 郎

印 刷 者

京 都 市 下 京 區 西 洞 院 七 條 南

内 外 出 版 印 刷 株 式 會 社

右 代 表 須 磨 勳 兵 衛

終

